

酷暑の候、会員のみなさまにおかれましていかにお過ごしでしょうか。今年度の第 48 回大会の報告を中心に、『通信』第 166 号をお届けします。すでに大会開催から 2 か月近くが過ぎております。『通信』の発行が遅れましたことをお詫びいたします。大会開催にご尽力くださいました実行委員のみなさま、大会参加記をお寄せくださいましたみなさまにお礼申し上げます。

I. 大会報告

全国地方教育史学会第 48 回長野大会記

須田将司（学習院大学）
竹内久隆（長野市公文書館）
加藤喜子（信州大学）

2025 年 6 月 7 日（土）・8 日（日）の 2 日間にわたり、第 48 回長野大会を長野市にて開催いたしました。長野県での大会は 3 度目であり、第 1 回（1979 年：長野県教育史刊行会・信濃教育会教育参考室・旧開智学校）、第 36 回（2013 年：信州大学（繊維学部資料館・講堂）・山本鼎記念館 上田女子短期大学）に続くものでした。大会準備に際し、現地の実行委員・加藤会員が長野コンベンションビューローに協賛を得てトートバックや看板を用意し、同じく実行委員・竹内会員が長野市教育委員会の後援を得たほか、長野市公文書館職員の協力を得て名札・配布物を準備するなど、皆様をお迎えするために奔走しました。二日間とも晴天に恵まれ、史料見学会・懇親会に約 40 名、研究発表・シンポジウムに 50 名超の参加（いずれも非会員含む）を得ることができました。お越しくくださった皆様に、実行委員会一同、心より御礼申し上げます。



6 月 7 日は、長野市公文書館で史料見学会を実施しました。まず館内のホールにお集まりいただき、同館長の挨拶、同館専門主事でもある竹内会員から 2007 年オープンからの来歴や収蔵物の概要についての説明の後、見学を行いました。

見学は、はじめに 3 つのグループに分かれて長野市公文書館専門主事の説明を受けながら、市役所文書や旧役場文書などが収められている 2 階収蔵庫、古文書（家分け）が収められている 3 階収蔵庫、長野市関係の書籍が収められている 1 階書庫などを回りました。

その後は、それぞれに見たい資料を閲覧していただく時間を取りました。じっくり閲覧していただくために、

2階会議室には後町小学校資料・吉田小学校資料を、3階共有スペースには城山小学校、昭和小学校、鬼無里東小学校、信濃裁縫女学校の資料を予め出しておきました。それぞれの場所に長野市公文書館職員がおり、閲覧・複写などに対応できるようにしました。その他の資料については、閲覧申請を出していただき、閲覧室で見いただくようにしました。後町小学校資料の中には、荒井明夫前会長から「一級資料だと言っていいのではないかと示唆されるような資料もありました。みなさんととても熱心に見ていただき、「もう少し時間がほしかった」という声をいただけるほど、熱気にあふれた充実した時間になったようで、準備する側としてはとてもうれしかったです。

見学会終了後、「富寿司長野駅前店」にて懇親会を開きました。はじめに佐藤環会長の挨拶・乾杯があり、その後、大変に和やかな雰囲気のもとで大いに懇親を深めていただきました。会の終盤には、佐渡大会や学会改革WGにご尽力された知本康悟会員、次期大会の実行委員を務める杉浦由香里幹事、新入会員の山本銀兵会員からご挨拶をいただき、本学会が地域にねぎし、相互に研究交流を深める場であることを確かめました。終わりには荒井前会長の学会発展にむけた熱い思いのこもったご挨拶があり、2日目に向けて意気を高めつつ終了しました。



6月8日は長野市生涯学習センターにて研究発表・シンポジウム・総会を開催しました。研究発表では2会場に分かれて10名の会員が登壇し、活発な質疑応答がなされました。発表者、そして司会を引き受けくださった会員のみなさまに感謝申し上げます。

午後の公開シンポジウムは「長野県における学校資料保存の最前線」では、須田将司・シンポジウム担当幹事の司会のもと、以下の3名の方に発表をいただきました。

パネリスト：遠藤 正教（国宝旧開智学校校舎学芸員）

竹内 久隆（長野市公文書館専門主事）

指定討論者：小野 雅章（日本大学）

長野県は「教育県」と言われる存在感を発揮し、教育史研究の分野でも『長野県教育史』はその質と量において群を抜いている存在でした。そうした自他共に認めうる豊かな教育文化を誇る長野県において、実は、学校資料保存は喫緊の課題になっていました。長野市（北信）、松本市（中信）、諏訪（南信）の学校資料保存の最前線に立つ3名による話は、まさに現時点において望み得る最高のメンバーであったと思います。成功例や工夫だけではなく、難しさや壁も話題にあがったことで、共感と問いとが会場内に満ち、もやもやと感じていた危機感をはっきりと自覚し、この問題を考える言葉や、共に考える仲間を見つけたシンポジウムになったと思います。本学会では、これまでも学校統廃合を考えるだけではなく、支援する取り組みも手がけるべきとの議論がありました。学校統廃合に際して学校資料の扱いを考える当事者になるのは、教員・地域住民・公文書館・博物館・行政当局など、幅広いことも今回のシンポジウムで照らし出された現実です。これら当事者の思いや悩み、その解決策や課題を横につなぐ場が必要だと思います。今後、本学会として何ができるのか、何をすべきか、など議論を重ねるきっかけになったと思っています。

大会運営を担当した者から、運営面について、今後の備忘録を記します。

まず、昨年度の北海道大会に続き、今大会も3人で実行委員会を構成し、分担・協力して準備・開催いたしました。大会全体として、資料見学会、懇親会・研究発表などが1つのまとまりをもつように意識して協力しつつ、同時に分担もすることで各実行委員の仕事は大分軽減されました。今後の大会運営に際する好事例を積み重ねたと言えます。

第二に、研究発表などのPC使用についてです。今後は、マックに限らずウインドウズであっても、HDMIからの接続でコネクタを準備していただくことを必須とした方がよいと思います。今大会では問題はありませんでしたが、過去の大会ではPCとの接続がうまくいかず、スクリーンに映らないという事態が起きました。今回の長野市生涯学習センターでは、両方のコネクタを保有しており備えられましたが、どの会場でも用意できるとは限らないと感じました。

第三に、公共施設を借用する制限で、第2日目の研究発表での質疑応答の時間を短縮せざるを得ませんでした。両会場の司会の方にはご無理をお願いしました。参加された会員のみなさまのご協力もいただき、時間内に片づけを終え、シンポジウムに移行することができました。

来年度の大会は5月30、31日に滋賀県大津市で行われるとのこと。琵琶湖のほとりで、みなさんにお会いできることを楽しみにしております。

【大会参加記】

第48回長野大会に参加して

田中 智子（神奈川大学大学資料編纂室）

筆者が本学会の大会に参加させていただくのは、今回が4回目である。最初は3年前に札幌で開催された第45回札幌大会であった。それまでの2年間、コロナ禍のためほとんどの学会が対面開催を見送っていた中、（少なくとも教育史系の学会では）いち早く対面開催を再開させたのが本学会であり、対面開催に飢えていた筆者は、当時非会員ながら参加させていただいた。以後、毎年参加させていただいている。

筆者は大学アーカイブズ機関に勤務しており、資料保存に関心がある。そのため、大会の1日目の資料見学会が一番の楽しみである。今回は長野市公文書館を見学させていただいた。竹内専門主事による説明の後、収蔵庫などバックヤードをひと通り見学させていただき、その後、あらかじめピックアップしてくださっていた学校関係の資料を見せていただいた。明治・大正期の「学校日誌」など貴重な資料がたくさんあり、たいへん興味深く拝見させていただいた。

見学会終了後は、長野駅前富寿司さんで懇親会が開催された。多くの方が参加して、お酒や食事を共にしながら、自身の近況や研究のことなど会話を弾ませた。これもコロナ禍にはできなかったことであるが、やはり学会には懇親会が必須だと実感した。

2日目の研究発表とシンポジウムは、長野市生涯学習センターで開催された。午前中の研究発表は、筆者は第2会場にいて、5人の報告者の貴重な報告を傾聴した。中でも興味深かったのは、柏木会員の大阪府泉州の隔週定時制課程についての報告であった。不勉強ながら筆者は隔週定時制という言葉は初めて聞いたが、それが泉州の紡績業と深く結びついていることを知り、たいへん興味深かった。

午後のシンポジウムは、「長野県における学校資料保存の最前線」というテーマで、旧開智学校の遠藤学芸員と長野市公文書館の竹内専門主事からそれぞれ、学校資料保存の現状と課題についての報告がなされた。フロアからも闊達な質問がなされ、大いに盛り上がった。中でも考えさせられたのは、設置主体の異なる学校文書の移管

の難しさであった。フロアから国立学校が持つ貴重な資料を市の公文書館等に移管できなかった事例が伝えられたが、貴重な資料を後世に遺すため、時には設置主体の壁を越えて協力し合うことが必要だと感じた。

以上の通り、有意義な2日間を過ごさせていただいたが、一つだけ残念だったことがある。研究発表の際、12時30分から別の団体会場を使用するというので、全体討論を10分早く切り上げざるを得なかったことである。大学ではない施設も利用して研究発表を行なうのは、他の学会にはない本学会の特徴であり、魅力の一つでもあるのだが、生涯学習センターのような場所は土日の利用が多く、落ち着かないばかりか地域住民の利用の妨げになってしまいかねない。やはり研究発表やシンポジウムは、なるべく大学の施設を利用したほうがよいのではないかと感じた。

それでも、本学会大会に他の学会にはない魅力があることに変わりはないし、資料見学会はこれからも、大学の枠にとらわれず、様々な機関で開催してほしい。

大会参加記

橋本 萌（信州大学教職支援センター）

新入会員として初めて大会に参加させていただきました。大変お世話になりました。私はこれまで「地方教育史」という枠組みに対して、遠くから覗き見ているような研究姿勢だったように思います。不誠実な態度だったと反省します。

今回、学会に入会し、第48回長野大会に参加したのは、シンポジウムが「長野県における学校資料保存の最前線」というテーマだったからです。パネリストとして、国宝旧開智学校校舎学芸員の遠藤正教氏、長野市公文書館専門主事竹内久隆氏が登壇され、そして指定討論者は小野雅章会員とくれば、参加しないという選択肢はありません。この機会を逃してはいけないと強く感じ、入会を決意いたしました。私の所属は信州大学となっておりますが、長野の生活はまだ1年ほどで、恥ずかしながら長野市公文書館は、訪れたこともないという有様でした。

1日目、長野市公文書館での資料見学では、大変丁寧な「おもてなし」を受け、館内のすみずみまで見学をさせていただきました。所蔵されている資料について解説を受けて、長野市公文書館の役割の重要性について認識を深める事が出来ました。帰り際に竹内専門主事とお話をさせていただく機会がございましたが、「信大生の訪問は、少ない」ということでした。私自身、松本キャンパスに籍をおいており、長野市は少し遠い存在ではありましたが、授業の折には、学生たちには是非紹介しようと思っております。

シンポジウムでは、旧開智学校の史料の収集保存における特異性と長野市公文書館の史料の収集のあり方が、対照的ともとらえられ、それぞれの施設の役割の違いなども、考えさせられるものでした。学校統廃合の進む中、後世に残しておくべきものが取捨選択される場面が生じるのは、普通のことなのかもしれません。その地域に生きて、その学校を守ってきた人（主に教員）の想いが反映される形であればいいなと思わずにはいられませんが、学校文書の管理保管は、規定通りに粛々と執り行われているのだろうと推測します。

娘の小学校の学級だよりに想いを馳せると、すべてデジタル配信、紙では配りませんというのが今日的な状況となっているのかなと思います。学期に1回行われる学級のお楽しみ会の様子を伝える写真と文面は、保護者のみを知ることでできるものとして、消えていく可能性が高い資料だと思います。こうしたものが残るための環境整備について、今後も検討しなければならないと思いました。

第48回長野大会は、私にとって非常に有意義な体験・学習の機会となりました。大会運営にあたられた大会事務担当の皆様に、心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

学校資料保存の取り組みの意味と意義を考えた二日間

山本 銀兵（富山大学）

2025 年度より本学会に入会しました富山大学教育学部の山本銀兵と申します。学部では教職科目である生活科、総合的な学習の時間に関する講義を担当しております。専門及び研究における関心の所在は、大正期、戦後初期にとくに盛んでありました「子どもを中心とした」教育実践史およびカリキュラム改革運動についてとなります。最近では、女子師範学校（代用）附属小学校の教育実践史の研究に取り組んでいます。

さて、今回の大会は上記のような私の研究上の関心において、まさに時機を得たものでありました。といいますのも、昨年度より富山師範学校女子部代用附属小学校を源流とする小学校へ継続的な資料調査を実施させていただいているところだったからです。こうした中で、「学校資料」の「収集・保存・公開」の取り組みに関するお話は、大変興味深いものでした。率直な感想としましては、驚きでした。これほどまでに学校資料の収集・保存・公開に関して尽力されている公文書館があるのだ、と。長野市立公文書館専門主事（認証アーキビスト）の竹内久隆会員の一連のお話の中で、特に印象深い内容であったことは、「学齢簿」や「学籍簿」などのような個人の特定が可能な情報を含む資料の収集と公開に関する公文書館内での意思決定についてでした。公文書館のレゾナートルとして「すぐには公開できないものを収集する意味」を問い、「現在は公開できないが 100 年、200 年後のことを考え、収集・保存することの意義」を見出し、共通理解を図った過程をお話しされていました。教育委員会等との渉外もなかなか煩雑なものであることも理解することができました。

こうした結果、破棄、散逸の憂き目にあいがちな学校資料の保存が徐々に進んでいく。こうした取り組みの姿を受け、私も教育史学を専攻する端くれとして学校資料の収集・保存の意味と意義を自覚した次第です。研究発表や懇親会等でも様々な先生方と交流させていただき、大変多くのご示唆をいただきました。学校資料の整理、保存の方法に関して、大変丁寧にご教示いただいた先生もございました。この場を借りて、感謝申し上げます。ありがとうございました。地方教育史研究の面白さと深さに魅了された二日間でございました。日常の地道な教育史研究のルーティーンに戻る英気を養うことができました。

次回は滋賀でお目にかかりたいと存じます。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

【総会報告】

○第 1 号議案 会務報告（承認）

- ・会員数 130 名（2025 年 5 月末現在。2024 年度 127 名/2023 年度 124 名/2022 年度 119 名）

○第 2 号議案：2024 年度決算および監査報告（承認）

○第 3 号議案：2025 年度予算（承認）

○第 4 号議案：事務局・幹事体制の変更について

- ・事務局が学習院大学・須田将司から甲南女子大学・軽部勝一郎に移転
- ・常任幹事の退任（菱田幹事）
全国幹事から常任幹事への異動（軽部幹事、小宮山幹事）
常任幹事から全国幹事への異動（須田幹事）

○その他：藤田薫監査から監査退任の挨拶があった。

後任の監査に長谷川鷹士会員が就任することが紹介された。

II. 諸連絡

【寄贈図書】

- ・須田将司会員より：教育情報回路としての教育会の総合的研究会『「近現代日本における「学び続ける教員を支えるキャリアシステムの構築」の総合的研究」報告書（Ⅲ）』2025年3月。本学会員の執筆者、須田将司「戦後茨城県における教員社会の再編—教育会の存廃動向を中心に—」白石崇人「1947年度信濃教育会役職員会議の教員団体一本・二本化論争—戦後長野県教育会存続を再考する—」、前田一男『「信濃毎日新聞」における信濃教育会の一本化論・二本化論関係記事（1947年1月から1948年4月および補遺）」
- ・斉藤利彦会員より：『「戦時教育令の研究」—天皇制公教育の崩壊過程—』東京大学出版会、2025年4月。本学会員の執筆者、斉藤利彦「最期の教育勅令「戦時教育令」と天皇制公教育の終焉」、逸見勝亮「学徒勤労動員政策の破綻—岩手県立水沢高等女学校1942年度入学生の事例を中心として」、前田一男「「戦時教育令」下における国民学校教育実践と教師」、須田将司「「学徒隊」の構想とその具現—1939 - 45年の「有事即応態勢確立」論議に着目して」
- ・名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育史研究室より：『教育史年報』2025年3月。本学会員の執筆者、吉川卓治「佐多愛彦と都市衛生」、杉浦由香里『「広報きら」教育関係記事目録（1）」

III. 教育関係の企画展情報

地方教育史関連のイベントを学会ホームページ（「全国の地方教育史関連イベント」https://assoc-zckyoiku.waseda.jp/?page_id=693）にて紹介しています。現在は次の企画展を紹介しています。ぜひ展覧会に足をお運びください。

【戦後 80 年 第 35 回テーマ展「戦時下の行田」】

日時：開催中～8月31日（日曜日）まで

時間：午前9時～午後4時30分まで（最終入館受付は午後4時まで）

会場：行田市郷土博物館 埼玉県行田市本丸17-23 電話 048-554-5911

料金：詳細は行田市郷土博物館のwebサイトで確認ください

以下、博物館のwebサイトから「展覧会の概要」を引用して紹介します。

【展覧会の概要】

今年は、終戦を迎えて80年の節目の年にあたります。市内においても戦争を体験した方々が高齢となり、直接戦時中の体験を聞く機会も年々少なくなりつつあります。郷土博物館では、現在までに市民の方々からさまざまな戦争に関わる資料や写真を収集・保管し、展示を行ってきました。

本展覧会では、戦後80年にあたり、これまでに寄贈を受けた戦争に関わる資料や写真などを展示、公開します。戦時下を生きた人々の暮らしや思いなどを伝え、戦争の悲惨さと平和の尊さを考え、次世代に語り継いでいくため、戦時下の行田の様子について紹介します。

展示の詳細は以下のリンク先（行田市郷土博物館）を確認ください。

<https://www.city.gyoda.lg.jp/soshiki/shougaigakusyubu/kyodohakubutsukan/tenji/kikaku/theme.html>

IV. 事務局より

【『地方教育史研究』第46号の発送について】

事務局移転作業に伴い発送が遅れておりますことをお詫びいたします。2025 年度会費を納入いただいた方に、順次発送いたします。

【第49回大会について】

杉浦由香里幹事により、史料見学会は2026年5月30日（土）に滋賀県公文書館、研究発表・シンポジウム・総会は5月31日（日）に大津市のピアザ淡海にて開催の予定で、準備が進められています。

【会費納入について】

今回の通信に金額入り（¥4,000）の振込用紙が入っている方は、2025 年度分が未納ですので、納入をお願いします。金額なしの振込用紙が入っている方は未納分がありますので、封入したメモをご覧ください、未納分も納入して下さい。入金された旨、ゆうちょ銀行から連絡がありましたら、速やかに当該年度の『地方教育史研究』を発送します。

【紀要のバックナンバーについて】

紀要のバックナンバーを購入することが可能です。1部につき1,000円（送料込み）です。在庫及び詳細については、学会HP内の「紀要」→『地方教育史研究』バックナンバー」をご参照ください。

【事務局移転のご挨拶】

長野大会終了後に、須田前事務局長から事務局を引き継ぎました軽部勝一郎と申します。佐藤会長を実務面で支えられるよう努めて参ります。どうぞよろしくお願いいたします。

全国地方教育史学会 事務局

〒658-0001 兵庫県神戸市東灘区森北町 6-2-23

甲南女子大学人間科学部総合子ども学科 軽部勝一郎 研究室内

TEL 078-413-3090 FAX 078-413-3007

E-mail kkarube@konan-wu.ac.jp

公式HP <https://assoc-zckyoiku.w.waseda.jp/>
